

## 火吹きの舞踏

じやわていー

「ひよつとこ」とは、間の抜けた仮面と、おもしろおかしい挙動が特徴的な、芸能の一形態、またはその演者を指す言葉である。古くは、日本全国に伝わる田楽（豊作を願って舞い踊る民間芸能）の道化役に端を発し、そこから転じて宴会の場で披露される定番の芸能となった。長らく日本全国で独自の演舞が上演されていたが、大正期に伝統芸能としての体系をまとめる動きが起こり、当時の主流派であった釜戸村系、安原会、見馬込流、榊流などが現代に伝わっている。

とまあここまで聞くと、大層ご立派な芸能なのであろう、と思う向きもあるのではなかろうか。しかし現代における「ひよつとこ」とは、そのへんの居酒屋で酒の肴にされるための場末のショウであり、酔いどれが野次を飛ばす対象であり、社会的地位の低い、しかして新味もない、当世風に言うならば「終わった」文化なのである。

では何故、「ひよつとこ」の説明がここに配置せられたのか？——それは本稿の主人公が、この「ひよつとこ」、であるからして。

善良なる市民、大葉<sup>おおば</sup> 大知<sup>たいち</sup>は憤っていた。一体何に？それは職場の無気力極まる雰囲気<sup>おおば</sup>に、である。彼の職場であるところの居酒屋「東郷亭」では連日連夜、「ひよつとこ」が上演されている。連日連夜、来る日も来る日も酒臭い親爺相手に笑いを取り、野次を飛ばされる、そんな仕事を長期でやりたがる奉仕精神に溢れた人材はそうそう多い筈もない。しかし親爺共は意外とこの「ひよつとこ」を愛しており、店には演舞はまだかとリクエストが頻繁に入る。つまりどういふことか？需要と供給のバランスが取れていないのである。となると、ここは非正規労働者諸君の出番となる。要するにバイトだ。かつてはプロの「ひよつとこ」を雇っていたが、賃金はかさむし、プロはより条件の良い仕事を望んでどんどん辞めていく。人々は見えざる手によって導かれる。さようならプロ。ここにちはアルバイト。つまりはそんな事情である。従ってバイトにおける待遇はお察し、恐らくご想像の通り。従業員のやる気も下降、苦言を呈する目の肥えた客もまばらに居りはしたものの、大半の親爺共は雰囲気を楽しむだけで満足、大勢<sup>たいせい</sup>には影響しなかった。ここまでが、現在までのあらすじである。

さて、そんなアルバイトの一人が大葉君である。さても正義感溢るる熱血漢、ということではなく、至って普通、よりもやや気弱な、真面目だけが取り柄のような、つまるところ地味な大学生であるところの彼が、本稿の主人公である。なんと彼にも取り柄はあり、それが「ひよつとこ」であった。親戚筋が家元である縁<sup>えにし</sup>で幼少から嗜んでおり、プロとまではいかないが、それなりに見られる立ち居振る舞い。即戦力として評価され時給もアップ。ホールの同僚女性から褒められることもしばしば。いやこの最後が観面<sup>てきめん</sup>だったのだろうか、彼は何を思ったか、ある日次のように主張し始めたのである。

「この店のひよつところは、もうちよつとやる気を出すべきだと思うんだ。ほら、苦情もちよつとずつ増えてきてるでしょ？そろそろ僕達が自発的に考えて、練度を上げていくべきだと思うんだ。そうすれば僕達、もつといい演舞ができると思う」

大体このようなことを、同僚相手に演説ぶった。なんだ、今迄そんな殊勝な意見は言ったことがなかったではないか。そもそもあいつの声あんなのだったつけか？いやいや——誰だあいつ。そんな目線が周囲から突き刺さるものの、大葉君は気にしない。いや気付いていない。彼の目線は全体を見るときもなく見ており、どこかを見ているような、見ていないような。もしかしたら世界の裏側でも見ていたのかもしれない。彼の脳内にあるような。

\*

当然、いちどきに全員が集まるわけでないため、演説は数回繰り返された。最初のグループから返ってきた反応は、核心を突いていた。特に声の大きかった同輩のトサカ頭、薬師丸君の弁はこうである。

「なんか、めんどくせえこと言ってんねー。いやさ、確かに俺ら、ちよつと最近ダレ気味だけど、さー、別に上から言われたわけでもないし？そこまでしなくていいんじゃないやねえの？俺らバイトだし。そんな責任ないし？でしょ、潰れるなら潰れるでいいし？」

トサカを左右に振りながら、周囲に同意を求め、視線を振り撒く薬師丸君。数人が同意するような雰囲気醸し出したところで、大葉君の横に素早く周り込んで囁く。

「なーダイダイ、急にどうしたのよ？女にでもいいところ見せたいんか？……さつきからチラチラ見てるだろお？それなら内緒で手伝ってやるぜ？な、別にそーんな大層なことやんなくてもさア、目的だけ達成すればいいだろ？」

彼は妙な調子の喋りではあったが、慧眼であった。大葉君の隠れた意図とかけて、最短経路で実現してやると解いた。その心は、面倒なことを回避したい彼の気質のためである。彼は面倒を回避するために全力を尽くすタイプであった。

ちなみにダイダイとは、大葉君の渾名である。

さて結論から言うと、大葉君はこの誘いに乗らなかった。何故なら彼は大葉君だったからである。確かに彼は女性受けを狙っていた。実際女性陣へ視線も向けていた。あわよくばという気持もあったかもしれない。しかし大葉君の志は既に別に移っていたのである。それは最初の動機ではあったかもしれないが、今やそれは結果に付いてくる副次的効果であり、何よりも重要なのは自らを向上させること、そのために周りも引き上げることと、少なくとも彼はそう信じていた。そこには欺瞞もあつたかもしれない。いや、きつとあつただろう。彼は初心うぶで潔癖であつた。自らの欲求を認めることができなかったのである。そして正当化を行った——と。

そんなことは知らないトサカ君は、核心を突くつもりでうっかり空蝉を突いてしまったという訳だ。せつかくの温情を踏みにじられたトサカ君は、雄鶏のように大きな声で喚きながら去っていった。

\*

次のグループから返ってきた反応は、批判的であった。

比較的年長者の多いグループであり、場は終始険悪なムードに包まれた。次の弁は中でも声の大きい先輩の角刈り頭、鴻池氏のものである。

「お前よくそういうこと言えるよね？つまりさ、俺達が手を抜いてるって、そういうこと言ってるわけだよな？——え？そういう意図じゃない？いやいや……お前がどういうつもりだろうと、そういうことになるだろうがよ。ちゃんと考えてみるよ。そういうところが上からだっていうんだよ。あー、前から気になってたんだがな、自分がちよつと踊りが上手くできるからって、直接的に物事を言い過ぎなんだよ。そう正論ばかり言ってもな、駄目なんだよ。もつと言いつてもんがあるだろ。大体俺達先輩の立場はどうなるんだよ。え？考えたことあるの？」

思わぬ方向から飛んできた批判に、大葉君は消沈してしまった。確かに他人にどう取られるかなど、今迄気にもしていなかったことを認めるしかなかったのである。一方で、腹の底から沸き立つものもあった。大葉君は理解力の高い人間である。この先輩の言っていることが、よく先輩にあて

はまることに気付いてしまったのであった。彼は考えた。まったく、この先輩というのは熱心な人間であると、そういう評判を聞いていた大葉君であったが、これは意味を取り違えていたのではないか、仕事に熱心なのではなく、保身に熱心なのではないかと。

\*

さて、完全なる失敗である。先の二例でおわかりのことと思うが、その後も散々であった。よくもまあ、あのような空気を感じながら、何度も挑戦を続けたものである。普通ならば早々に諦めてしまふところであろうが、大葉君はそうはしなかった。それは何故か。

実際のところ、彼の目的は変化し続けていた。いや、変化しなかった。最終的に目指す結果は変わっていない。店全体のひよつとこの練度を上げること。そこは変わっていない。変わっていったのは動機である。始めは桃色の想念に支えられた自己実現であった。次に立ち上がったのは英雄的な行動に対する憧れであった。さて、次に立ち上がったのは、反発であったか、義憤であったか、嫌悪であったか——まあ、ともかく快い感情ではない。

彼は考えた。まず手を付けなければならぬのは人を変えることである。そして学び取っていた。トサカ頭や角刈りが言ったことは正しい、彼らにとってでは。であればそこを逆手に取ることも可能である。相手の本質的欲求を見抜き、そして言葉巧みに、プライドをくすぐるように近付くのである。

彼は自分の中身が、この短期間で大きく変化していることを悟っていた。このような思考の流れは今迄の人生ではなかった。しかし、であればこそ、このようなことを考え始めたのである。自分

が変わったということは、他人も変わる可能性があるということだ。そして変えられる可能性もある、ということ。自分はどのようにして変わったのだったか。そこを応用すれば――。

彼は地味で真面目な人間であった。そこだけは、変わっていない。

あとがき

たぶん3671字くらい。

うーむ。思ったよりダイナミックな話になってしまいました。テーマは「悪」でしたが、裏テーマは「表裏一体」というところでしょうか。割とストレートな話なので解説は要らないと思います。さて、文体の話。今回の文体は泉鏡花、の文体に影響されたrailsoftの希さんまたの文体に影響された形になっております。こうして本質は変化していくのです。

あととは何か。とりあえず適当なことを書こう。なんで「ひよつとこ」だったのか？うーん、いや適当です。「ひよつとこ」といえば火吹きと仮面のイメージがあったので、そのへんから色々と思いつくままに設定を作りながら書いた結果がこれですよ。ええ。あ、そういえば東郷亭の店長は、ツルっ禿の平人にするつもりだったんですが出すの忘れてました。

手習いで書くとしてでも自分のパターンが出る。悪いとは言わないけれど、良いとも言えない。どちらでもないということ、どちらでもいいということ、つまり自分次第、満足の問題です。そういう意味ではそれなりの新境地を（見掛け上）開拓できたような気がするのです、これでよしとします。いや、そうしなければここに投稿することはなかったでしょう。つまりそういうことなのです（何が？）。